

台湾中山醫學大學護理學系と看護学部との 学生間国際交流システムの構築と課題

河津芳子 風間眞理 水野千奈津 石光美美子

(Yoshiko KAWATSU Mari KAZAMA Chinatsu MIZUNO Fumiko ISHIMITSU)

【要約】

看護学部では平成26年度に、台湾中山医学大学護理学系との間で学生間交流協定を結び、異文化理解のための国際交流プログラムを開始した。そのねらいは、国際的な視野の拡大と柔軟な思考の獲得である。学部内に交流委員をおき、受け入れ時には研修プログラム作成、スムーズな研修活動と日常生活の支援、見学旅行の引率や土産物の準備等々を行い、派遣時には留学生募集、留学生活の過ごし方、日々の連絡方法等を実施した。両学部間では、メールによって連絡を取り合いながら進めた。学生たちはそれぞれに多くの学びを得たと述べたが、プログラム実施に関する教員の負担や学生の経済的負担が大きい。留学生の日常生活支援体制の整備や留学費用負担軽減のための財政支援が望まれるところである。今回の一連の体験と、それによって得られた課題をまとめて報告することで、今後の国際交流の推進に資するものとした。

キーワード：異文化理解 学生間国際交流 台湾

I. はじめに

目白大学看護学部では、平成26年度に初めて、異文化理解をねらいとした学生間国際交流プログラムを開始した。かねてから学生の要望があったものの、過密カリキュラムや長期の実習などから期間確保が困難なため実施に至らなかった。だが、平成25年3月中旬に共同研究の可能性を探るために、台湾の中山醫學大學護理學系（Chun Shan Medical University School of Nursing）を私的に訪問したことを契機として、教員の相互訪問があり、隔年に短期で訪問しあう学部間交流協定を平成26年2月に結ぶことができた。そして、同年6月に中山醫學大學（以下CSMUとする）護理學系から4名の学部生を受け入れ、平成27年3月に学部生2名、大学院生1名の計3名を派遣した。

この経験について、実際の諸活動と課題になったことを述べ、今後の国際交流促進の参考資料としたい。

II. 看護学部の学生間国際交流のねらい

今日、国際的な交流機会の増加、疫病や紛争の世界化、国外からの観光客の増加などのいわゆるグローバル化の進展に伴い、健康問題や看護問題を国際的な視野からとらえ、それらを解決することのできる人材の育成促進と学生や教員の国際交流を活発にする機運が高まっており¹⁾、本学部の教育目標にも、国際化への対応として国際的視野を持つ人材の育成があげられている。これを具体的に言えば、異文化理解とコミュニケーションスキルの向上ということになる。

異文化理解やコミュニケーションスキル発達の土台は、共感的理解や非操作的態度にある。他者理解と簡単に言うが、相手のすべてが分かるなどということとはできないし、自分のすべてを分かれても困る。また、自分の思い通りに人を動かすことはできない。コ

コミュニケーションの本質は、「伝える、分かち合う、共有する」であり、その目的は、お互いの信頼関係を確立し、それを維持し続けることである²⁾から、相手が言おうとしていることは何か、本当に聞いてほしいと思っていることは何なのか、話に耳を傾けると同時に声の調子や態度にも注意を払いながら聞く。そして、自分が話したいことは何か、どのように話したら伝えられるかなどを考える。こうした姿勢を身につけるためには、人それぞれの違いや正常異常の曖昧さなどに思いをいたし、謙虚になることが大切である。

一人ひとり異なる人間の理解や意思尊重が不可欠である看護や教育では、年齢や生活史がそれぞれ異なる対象者との日々の接触のなかに、共感的理解や非操作的態度を体得する機会があるが、日本人同士で母語を遣ったコミュニケーションでは、そうしたことを忘れがちになる。けれども、母語と異なる言語を使用することで、違いを意識し注意深くなることができる。そこにこそ、学生間国際交流促進の大きな意義があると思う。人間や物事を多面的にとらえうる柔軟な思考を獲得するには、異文化との接触が有効な機会となると捉えて、学生間国際交流の推進をはかろうとするものである。

Ⅲ. 交流協定締結

協定締結準備から締結、留学生受け入れ・派遣の実際についての主要な出来事を、表1に示した。

CSMU 護理學系では、既にアメリカはじめ数か国と学生間交流を行っており、日本の大学とも持ちたいと考えていたとのことであった。平成25年6月、学科会議で意義と経緯を説明し学部教員の賛同を得た。これを受けて、学長および岩槻キャンパス首脳部に、学生間交流を開始したい意向を報告し、賛同を得ることができた。そこで、学部内に国際交流委員会を設け、準備に当たった。同年7月にCSMU 護理學系の教授4名が本学部を来訪、具体策について話し合った。その結果をもとに、9月に基本的事項を確認し、再度本学部の教員に意思確認を行った。再三教員の意思確認を行ったのは、合意のもとに全員で進めるという意識を高めることがねらいであった。11月に、CSMU 訪問の機会を得られたため、CSMU 護理學系主任および国際交流担当教授と細部について話し合った。

CSMUと目白大学は既に大学間で交流協定を締結しており、今回の交流協定は学部間協定であったので、新宿キャンパスの国際交流課に協定締結までのスケジュール、発議の仕方、協定書の内容等々について助言を受け、学部長がCSMU 護理學系主任および国際交流担当教員と頻回にメール交換し、交流協定案を作成した。

平成26年1月、護理學系主任教授の署名入り協定書2通を受領し、同月の教授会で承認を受けた。その後、学部長が協定書に署名し、2月5日に国際交流課より1部をCSMU 護理學系に郵送し、2月10日受領のメール返信を受けて締結を完了した(表2)。次いで、2月14日具体的な進め方についての覚え書英訳版(Request for Cooperation)を国際交流課から受け取り、メール添付で送信した。

Ⅳ. 留学生受け入れの準備と実際

1. 宿泊施設の確保

平成25年3月3日にCSMU 護理學系から派遣学生募集開始の連絡があり、本学部では学生ボランティア募集を開始した。留学生の生活基盤となる宿泊施設が岩槻キャンパスにはないため、民間の学生向けアパートを借用することにした。大学の近隣にあり、廉価で、男女の応募者があっても利用でき、基本的な設備が整っているなどを条件に探し、バス利用で通学できる市内の学生用アパートを日割り計算で借用した。

2. 研修プログラムの作成と実際

受け入れ時の研修プログラムを表3に示した。プログラム内容は、学生との交流の機会を各学年に設ける、新宿キャンパスや埼玉病院キャンパスの見学を含める、病院や高齢者施設の見学の機会を設ける、日本の家庭生活を体験する等を挙げて検討した。見学病院には日本で最も看護水準が高い病院のひとつとされる聖路加国際病院をあげ、手続きに約2週間を要したが、特殊な病院を見学したという感想に終わったようであった。高齢者施設は小旅行もかねて学科教員紹介の富士山麓にある「あかなすの里」見学とした。富士山旅行は、天候が悪かったためか感動的な感想は聞かれなかったが、「あかなすの里」には旧満州引き揚げ者の方もおられ、中国語が通じたことなどもあって楽しく過ごし、自国の高齢者についても改めて関心を抱

表1 中山醫學大學（CSMU）との交流経過

年 月 日	事 項	内 容
25年 6月 6日	教員の意向確認	学科会議にて教員の意向確認。全員賛同。
7月 8日	学生間交流の可能性を検討	CSMUより教員4名来訪し、打ち合わせ。
11月12日	学生間交流の具体策案作成。	CSMU訪問に合わせて、打ち合わせ。
11月21日	交流協定案検討	学科内国際交流委員会発足。
11月26日	協定締結スケジュール確認	国際交流課に問い合わせ。
12月 9日	新規事業計画案提出	稟議書提出。
26年 1月 7日	署名入り協定書受領	CSMU学部長1月1日付。
1月23日	教授会報告	交流協定締結について承認。
2月 5日	協定書交換	両学部長署名入り協定書、新宿キャンパス国際交流課より発送。
2月12日	学生に公示	CSMUとの交流協定締結について、ポスター掲示と口頭説明。
3月 3日	CSMU留学生募集開始	本学では学生ボランティア募集開始。
4月26日	留学生および留学期間決定	留学生4名、期間6月23日から7月18日。
5月 7日	研修スケジュール確定	研修スケジュール送信。留学生顔写真付きプロフィール受信。
5月21日	宿泊施設契約	予め宿泊施設仮押さえのための契約金支払い。
6月 6日	教授会報告	スケジュール、役割担当について。
6月18日	留学生急病の際の対応策	丸山記念病院看護部長に急病の際の対応依頼。
6月19日	スケジュール最終調整、	スケジュール最終調整、バス時刻表および持参品について連絡。
6月24日	留学生到着	出迎え。携帯電話を国際交流課より借用し留学生に貸与。
6月27日 ～ 7月25日	関係記事ホームページ掲載	ホームページ表題 『看護学部と台湾中山醫學大學との国際交流プログラムがスタート。』 『台湾中山醫學大學の交換留学生在が元気に活躍中。』 『看護学部の交換留学生在がプログラム全日程を修了、帰国しました。』
7月24日	派遣準備開始	CSMU国際交流委員交替の連絡。
10月30日	参加者募集ポスター掲示	同時に英文ポスター CSMUに送信。
12月 2日	応募学生提出書類作成	顔写真付き自己紹介、学びたいこと、保護者の参加承諾書。
12月 3日	滞在費用概算連絡	CSMUより滞在費用概算受信。
12月15日	応募者確定	学部生2名、大学院生1名の計3名応募。 審査後全員承認。
27年 1月13日	派遣学生プロフィール送信	写真つきプロフィールと学びたいこと。
1月30日	派遣学生への説明	準備内容、保険申し込み、海外渡航の登録、土産品等。
2月24日	学生寮使用許可の連絡	留学期間中、CSMU学生寮使用許可の連絡。
2月27日	派遣学生への説明（3回目）	保険証書と使用方法、学生からCSMUに挨拶メール送信。
3月 2日	国際交流課へ派遣内容報告	メール添付送信。
3月 4日	研修スケジュール受信	学生へスケジュールと予習内容を手渡し。
3月 7日	派遣学生出発	成田より出発。渡航前に外務省へ登録。
3月27日	関係記事ホームページ掲載	ホームページ表題 『看護学部の学生と研究科の院生が台湾中山醫學大學で研修を受けました。』
5月11日	報告会	在学生在を対象に開催。

表2 日本目白大学看護学部と台湾中山醫學大學護理學系間の学生間交流に関する協定

<p>日本目白大学看護学部と台湾中山醫學大學護理學系（以下両校看護学部という）は、「目白大学と中山醫學大學間の相互交流協定」に基づき、両学部間の学生間交流を行うため、これに関する協定を締結する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 両校看護学部は学生の国際的視野を広めるために、隔年で学生の交換を実施するものとし、西暦の偶数年は中山醫學大學が、奇数年は目白大学が派遣大学となる。 2. 交換する学生数と期間は、4名×4週間を基準とする。但し、両校看護学部の事前の協議により、8名×2週間～16名×1週間等と換算できるものとする。 3. 実施時期については、目白大学は8月あるいは3月に、中山醫學大學は6・7月に学生の派遣を行うものとする。 4. 学生の受け入れは、留学を希望する学生の大学の学部長の推薦に基づき、受け入れ大学の学部長がこれを許可するものとする。 5. 交換期間、受け入れた看護学部は責任をもって学生の学習、生活の監督及び宿舍等の手配をする。 6. 交換期間の教材費、宿泊費、生活費および渡航に要する旅費等は、すべて当該学生が自弁するものとする。 7. 留学を許可された学生は、受け入れ大学の学則等の学内規則を遵守するものとし、これに違反した時、受け入れ大学の学部長は留学を取り消すことができる。 8. 上記以外の事項が生じた場合は、その都度両大学が協議するものとする。 9. この協定の有効期間、破棄については大学間相互交流協定の規定を準用する。
--

表3 受け入れ時研修プログラム

	月/日	曜日	内容		
			午前	午後	夕
第1週	6月23日	月			羽田空港着18:20 出迎え、寮へ案内
	6月24日	火	寮まで迎え 関係個所挨拶	岩槻キャンパス案内	
	6月25日	水		基礎看護学演習見学	歓迎会
	6月26日	木	岩槻区内名所案内		
	6月27日	金	相互に学部紹介	基礎ゼミ見学	
	6月28日	土	留学生希望企画		
	6月29日	日	留学生希望企画		
第2週	6月30日	月	講話（日本の看護教育）	MUSC訪問/大学院・認定課程紹介	
	7月1日	火	新宿キャンパス訪問 学長表敬訪問		
	7月2日	水	昼 ポットラック・パーティ		
	7月3日	木	留学生希望企画		
	7月4日	金	3年次実習学生と懇談	成人看護学演習見学	
	7月5日	土	休日		
	7月6日	日	ホーム・ビジット		
第3週	7月7日	月	高齢者施設訪問（静岡）		
	7月8日	火	富士山周遊観光		
	7月9日	水	休日		
	7月10日	木	留学生希望企画		
	7月11日	金	聖路加国際病院見学		
	7月12日	土	留学生希望企画		
	7月13日	日		オープンキャンパス視察	
第4週	7月14日	月	土産等買い物 浅草観光		
	7月15日	火		成果発表会	送別会
	7月16日	水	帰国準備		
	7月17日	木	空港見送り		

いたようであった。

日本の家庭生活の体験にはホーム・ステイという手だてが考えられるが、準備が整わないため、ホーム・ビジットとした。学部生から候補家庭を挙げることができ、受け入れてくださったご家庭の多大なご協力を得て、楽しいひと時を過ごせたようであった。

3. 学生ボランティア

研修プログラム作成や研修中の運営協力者を募集したところ、7名が協力を申し出てくれた。学部生の中には留学経験がある者もいて、歓送迎会を始め、各種のプログラムで精力的に活動してくれた。そのおかげで他の学部生もスムーズに交流することができたようであった。

4. その他

留学期間中の急病時応急処置のために、校医の所属する病院の看護部長を訪ねて依頼、大学近辺に住居のある教員2名を緊急時連絡員とした。幸い、活動の必要はなくて済んだ。平素の連絡用に国際交流課から携帯電話2台を借用し、二人に1台ずつ貸与した。留学生用の研修室を学内に1室準備し、留学生たちの研修準備、まとめ、休憩等に使用した。お茶はラウンジで、昼食は学生食堂で、朝夕の食事は自炊等で済ませていた。自由時間には、留学生たち自身で積極的に計画して、日光、浅草、築地、新宿等の観光やショッピング

ングに出かけて、それぞれ満喫したようであった。

以上の留学期間中の活動の様子を、3回にわたって、ホームページに掲載した。

V. 留学生派遣の準備と実際

受け入れ完了と同時に、派遣準備を開始した。CSMU 護理學系では国際交流担当委員が交替になったが、幸い、後任の委員も面識があったので、受け入れと同様にメール交換によって打ち合わせながら進めた。

1. 研修プログラム

派遣時の研修プログラムを表4に示す。

2. 実 際

表1に示すように平成26年10月末に募集のポスターを掲示し、併せてCSMU 護理學系に英文ポスターをメール送付した。12月に応募学生の提出書類を作成し、応募学生が少なかった為に勧誘をして、中旬にようやく学部生2名、大学院生1名の応募者を得た。CSMU 護理學系からは、滞在費用の概算と学生寮を廉価で貸与できる旨の連絡があった。学生には、応募書類の記入、海外旅行保険の申し込み、滞在中のスケジュール、また、土産品の準備等で計4回のガイダンスを行った。派遣前にスケジュールの概略等を新宿キ

表4 派遣先 研修プログラム

Date		8am-12pm	noon	1pm-5pm	evening
Mar. 7 th	Sat			Airport pickup	Dinner Dormitory
8 th	Sun	Shopping for necessities	City tour		
9 th	Mon	Introduction to School of Nursing	Welcome lunch party	Student interaction	Free time
10 th	Tue	Tour to CSMU Medical Center		Physical assessment	Free time
11 th	Wed	Clinical Site		Free time	
12 th	Thu	Clinical Site		Free time	
13 th	Fri	Attending undergraduate Courses (or clinical site practice)			
14 th	Sat	Tour to Nantou County (scenic areas)			
15 th	Sun	Tour to Southern Taiwan			
16 th	Mon	Tour to Taipei City			
17 th	Tue	Hospital Tour (Psychiatric unit)			Free time
18 th	Wed	Clinical Site (depends on students' interests)			
19 th	Thu	Half day City tour		Free time (packing and shopping)	
20 th	Fri	Airport			

キャンパスの国際交流課に報告した。3月7日元気に出発し、27日に無事帰国した。その内容の一部を、受け入れ時と同様に、ホームページに掲載した。

3. 報告会

研修に参加した学部生は、率先して報告会を開き、PPTを使ってまとめ、質疑応答を含めて約1時間で発表した。発表には楽しそうな交流の様子や美味しい食事、参加した授業の様子と意見交換、大学紹介の発表があり、折々に看護の考え方をまじえて報告している様子から、学部生たちの3年間の逞しい成長を知ることができた。また、院生は、先輩として有意義な留学生を送れるような心遣いをしていた。夏に来学した留学生たちも参加して旧交を温めることもできたようであった。無事に楽しい留学生を送れた陰には、受け入れを担当して下さった委員をはじめとするCSMU 看護学系教員の細心のご配慮があったことがうかがえた。

VI. 今後に向けて

今回の交流については、学部教員の一致した協力体制、学生ボランティアの活動と新宿キャンパスの目白大学国際交流課の支援が成功に導く大きな力となった。これを一時の成功体験として終わらせるのではなく、今後、交流を継続していくためには、幾つかの課題があげられるが、特に次の2点が大きな課題であった。

1点は留学に関する財政支援であり、2点は、生活上の支援に対する教員の負担である。

今回の留学生募集に際して、双方とも留学希望はあるが経費がかさむため参加は見合わせるという意見が少なくなかった。

経費がかさむ大きな理由のひとつは、住居にかかる経費が高いことがある。新宿キャンパスには学生寮があり、低廉な価格で入居することができるが、岩槻キャンパスには学生寮が無いため、民間のアパートを使用することになる。このアパートは学生が遠距離の実習施設の場合借用しているもので、一般より低価格であるとはいえ、安くはない。また、通学の交通費も必要である。今回は、大学に比較的近いアパートを得ることができたので、必要最小限のバス利用にとどめ、徒歩30分を含めて通学したとのことであった。受け

入れは6～7月という季節で夕刻も遅くまで明るいことが幸いしたが、治安の問題もある。宿泊については、ホーム・ステイという手だても考えられるが、滞在先確保が不確定になるため、容易ではない。派遣においては、中山醫學大学の学生寮を利用することができ、受け入れに較べると、廉価でまかなえた。

次に、生活上の支援のための教員の負担である。目白大学の新宿キャンパスには国際交流課があり、専属のスタッフがいて、諸種の支援を行っている。しかし岩槻キャンパスには、これが無いため、交流協定の締結に始まり、受け入れ準備、大学までの送迎、生活上の必要物品の整備と使用方法、買い物の場所と方法等々生活を始めるにあたっての準備と説明、健康管理と傷病の際の受診機関確保、施設見学等の引率、留学生用の部屋と必要な机・椅子や事務用品の準備等々、学生の生活上の支援を全て教員が行わなければならない。これらを日常の業務とくに学生の実習指導と並行して実施するのは大きな負担である。国際交流に対するねらいを達成させたいという強い意欲を持ち合わせているとはいえ、教員の過重負担は避けたい。

新宿キャンパスの国際交流課の支援をいただいたが、岩槻キャンパスにも専属のスタッフが置かれることを要望したい。そのためには、現在のようなごく短期間の交流に限定せず、交流先も数カ国に拡大し半期だけでも海外留学ができるよう検討していく必要がある。

最後に、言葉の問題があげられる。英語を共通語として交流するとしているが、教職員、学生ともどもたどたどしい英語であった。けれども、学部生の中には留学体験のある学生や中国語を話せる学生がいて、ボランティアとして活動してくれたため、かなりスムーズに交流を進めることができた。派遣学生の英語力も確かとは言えない程度であったが、取り組む意欲と受け入れたCSMUの教員や学生の温かい支援によって引率教員なしで充分学びを得ることができた。

VII. 終わりに

受け入れたCSMUの学生たちの感想や派遣した学生たちの帰国報告の様子から、短期間ではあっても、異文化接触の体験から大きな収穫を得ていることが明らかであった。学生、院生はもちろん教員においても交流を体験し、国際間の共同研究が推進されることを

願っている。今後、交流が拡大していくことを願い、本稿がそのための参考の一助となれば幸いである。

加えて、受け入れた学生たちも派遣した学生たちも体調を崩すことなく、元気にまた楽しく留学生活を送ることができたのは、さすがに看護学生たちと感心させられた。

謝辞

今回の交流にあたって本学および中山醫學大學護理學系の多くの教職員の協力と支援を受けた。なかでも中山醫學大學護理學系主任のDr.Lee、国際交流担当

のDr.YenおよびDr.Lu、本学社会情報学部の張玄宗教授、本学国際交流課山岸容子氏の多大なご協力とご支援をいただいたことを記し、謝意を表する。

【文献】

- 1) 文部省中央教育審議会第一次答申：21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（1996）、
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/tou shin/960701.htm（最終閲覧日 2015.9.27）
- 2) E.ウィーデンバック：コミュニケーション 効果的な看護を展開する鍵. 2, 日本看護協会出版会（2007）

（2015年10月1日受付、2015年11月24日受理）

Development of cooperation student exchange system between chung shan medical university, school of nursing and mejiro university, faculty of nursing

Yoshiko KAWATSU¹⁾ Mari KAZAMA¹⁾ Chinatsu MIZUNO¹⁾ Fumiko ISHIMITSU¹⁾

[Abstract]

In 2014, Faculty of Nursing at Mejiro University initiated an international exchange program with Chung Shan Medical University School of Nursing in Taiwan. The program aims to expand students' international perspectives. The exchange committee developed training programs for incoming exchange students, while facilitating smooth training activities. The committee also provided support for students' everyday life. When dispatching students, the committee conducted student recruitment, provided advice regarding life as international students, and acted as a contact point for daily life interactions. All students stated that they learned substantially from the exchange program; however, the program increased the task for the teaching staff and the financial burden on students. Hence, there is a need to reduce the program fees and also further improve the support system for students. This paper discusses our experiences and challenges associated with the exchange program in hopes that it helps expand international exchanges in the future.

Keywords cross-cultural understanding, international exchange program, Taiwan

1) Faculty of Nursing, Mejiro University